戦後民主主義 崩した国葬

戦後民主主義 崩した国葬
自衛隊の役割／骨抜きされた法制局
加藤陽子

憲法違反で国民の批判が渦巻く中で強行された「安倍国葬」は、とりわけ自衛隊が気になっていた。朝日３日「長谷部 杉田 考論＋加藤陽子東京大教授」で、加藤教授も自衛隊の役割について語っていた。３人の発言を抜粋して紹介する。

加藤　私が気になったのは、国葬における自衛隊の役割です。明治以降、国民が支持する国家の「物語」を生み出したのは軍事力で、その統帥権は天皇が持っていた。だからこそ、国家に偉勲があった者に対して、天皇の特別なおぼしめしによって行われた戦前の国葬では、軍が前面に出ていました。それが今回、変に矮小化され、国葬はもとより安倍さんの私的な葬儀にまで陸上自衛隊の儀仗隊を出した。遺骨を載せた車は、国葬会場に向かう途中に防衛省を回った。首相が文官として自衛隊の最高指揮権を持つとは言っても、戦前の現在とでは国家の成り立ちがまったく違うのだから、それでよかったのかという問題は残ります。「伝統」「慣例」といった言葉でうやむやにされるべきではないと思います。

杉田　国家に寄与したとされる人の葬儀に儀仗隊を出すということは、国家の本質的な部分は軍事である、というイデオロギーを広めることにつながるのでは？

長谷部　これは憲法学者の樋口陽一さんが常々おっしゃっていることですが、日本国憲法は９条によって軍の正当性を否定し、それによって自由な公共空間を戦後の世界に生み出した。国葬で、安倍さんの偉大さを自衛隊に象徴させようとしたのだとすると、それは戦後の民主主義、立憲主義と真っ向から対立します。逆に言うと、安倍さんが戦後民主主義や戦後立憲主義と対立する政治家であったことを国葬での自衛隊の役割が物語っている。また、家族葬にまで儀仗隊を出したことは、防衛相が実弟だったことと相まって、典型的な縁故主義を物語ることになるでしょう。それで本当によかったのか。

杉田　一方、不幸な事件をきっかけにとして、安倍政治的なものの総決算に入っている感じがします。特に第２次安倍政権においては、権力が官邸に集中し、恣意的な政治が横行しました。野党も我々も、当時からずっと批判してきたが、世論の大勢にはなかなか浸透しませんでした。ところが事件後、一気に浸透している。同調圧力や忖度で成り立っているような実体的基礎のない権力は、その中心がなくなればわりと簡単に崩壊します。かつて、自民党の幹事長だった金丸信がそうでした。亡くなったら蜃気楼のようにその権力構造は消えてしまった。

加藤　たしかに、前回鼎談をした半年前と今とでは、社会の空気が変わりましたよね。東京五輪をめぐる汚職事件の捜査が進むとか、伊藤詩織さんを中傷する投稿に「いいね」を押した自民党の杉田水脈氏に高裁で賠償命令が出るとか、ひょっとすると安倍さんがいなくなったことと関係があるのかなと思っている人も少なくないでしょう。

（2022 年 11 月 5 日）